忍法伝　第13回

作・佐々木守　　え・岡本颯子

第九章　一つの国の三つの民族

(一)

日本海の荒波がくだけ散る断崖――。その岩にうちよせられてこわれた船が一隻。波に洗われ、材木は腐り、みるかげもない破れ船だ。だが、もとは、おそらく日本では見たこともない大きな立派な船だったにちがいない。

あの船にのって――と弓月(ゆづき)は考える。

――あの船にのって、天皇家の先祖が、はるか海の彼方から日本へ上陸して来たのだろうか。

弓月の目に、とつぜんよろめくような幻影が浮かぶ。

それは――荒波をのりこえて、何隻、何十隻という船が、隊伍を組んで日本めがけてやってくる姿だ。

いったい、おれの知らないはるか昔に、どこから、どれくらいの人間たちが日本へやって来たのだろうか。そして、その人間たちは、どのようにしてこの日本を征服して天皇にまでなったのであろう。

海を渡る大船団――その幻影を、弓月は酔ったようにいつまでも見つづけた。

「そうさ、おれたちの先祖は、はるか海の向こうの大陸から、この日本に渡って来た。はじめに上陸したのは九州、そして出雲(いずも)、大和(やまと)のあたりに上陸した奴もある。中にごくわずかの船が、嵐に流されこの能登(のと)に漂って来た。そして、そのまま能登に住みつき、朝廷の秘密の軍団となったのさ……」

能登軍団の少年隊長白布(しらぬの)は、破れ船を見つめながら、はっきりとそう言う。

信じられない……しかし信じなければ、この能登軍団をどう説明できるというのだ。

「わかったよ、白布」

ボソリと弓月が言う。

「だけどその船にのって来たのは、何という民族なんだ」

「フフフ、名前なんてないさ。大陸の草原地帯に住んでいた馬にのる民族なのさ」

「馬にのる民族――」

「そうだ。船には馬もたくさんのせて来た。ところが、この日本に前から住みついていた連中は、馬にのることをしらなかったのさ。だから、我々の民族と闘っても負けいくさがつづいたんだ。奴らは、おれたちの馬の脚にふみにじられたのさ、アハハハハ」

白布は気持よさそうに笑う。

海を渡って来た騎馬民族！　一斉にひずめの音も高く、馬にのることを知らぬ日本古来の民族をけちらして、そのかしらになった。そして統一国家を作る。その名は大和朝廷！

海を渡って来た騎馬民族！ それは国を盗みに来た奴らではないか。

「船には、女ものっていたのか」

弓月があいかわらずボソリと聞く。

男だけではあるまい。女もたくさん渡って来たにちがいない。そして騎馬民族は日本の土の上でどんどん子孫を増やしてきたのにちがいない。

「アハハハ、女は足手まといだからな。一人ものせてこなかったよ。女は戦いには参加できないじゃないか」

「そんなバカな！」

弓月は思わず大声を出す。

「じゃ白布、お前や騎馬民族の若者たちも一人一人海を渡って来たのか？」

「いや、おれはこの日本で生まれたよ」

「……？……」

「ふしぎそうな顔をするな！ そのわけはすぐわかるさ」

言うやいなや、白布は、弓を力一杯ひきしぼると、ヒューッと矢を放った。

矢はうなりをたてて一直線にとぶと、プツリ！ 破れ船のふなばたにつきささった。

はっとして、物かげにかくれた白い影。少女玉櫛だ。

「危いじゃないか」

弓月がどなる。

「ついてこい、弓月！」

白布は馬に一ムチあてると一散に砂丘をかけおりる。

負けてたまるか、弓月もつづいて砂丘の砂をける。

二頭の馬は、玉をころがすような勢いで海岸に向かってまっしぐらにかけた。

物かげにかくれた玉櫛は、あわてて波打ちぎわを走りはじめた。

「ワハハハハ、ワハハハハ」

大声で笑いながら、白布は馬を駆って玉櫛をおいかける。

「助けてーっ」

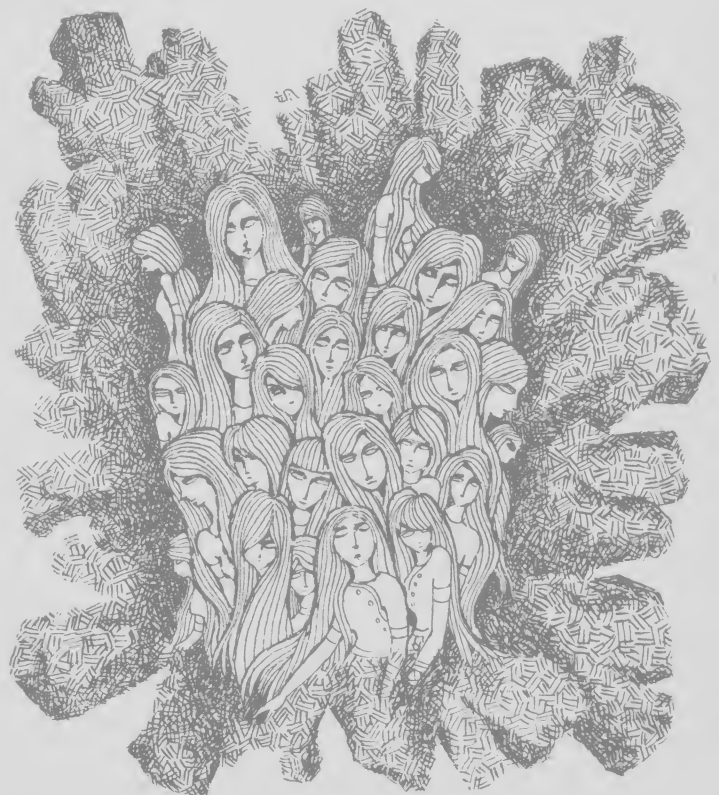
馬のひずめにけちらされそうになりながら玉櫛は悲鳴を上げる。

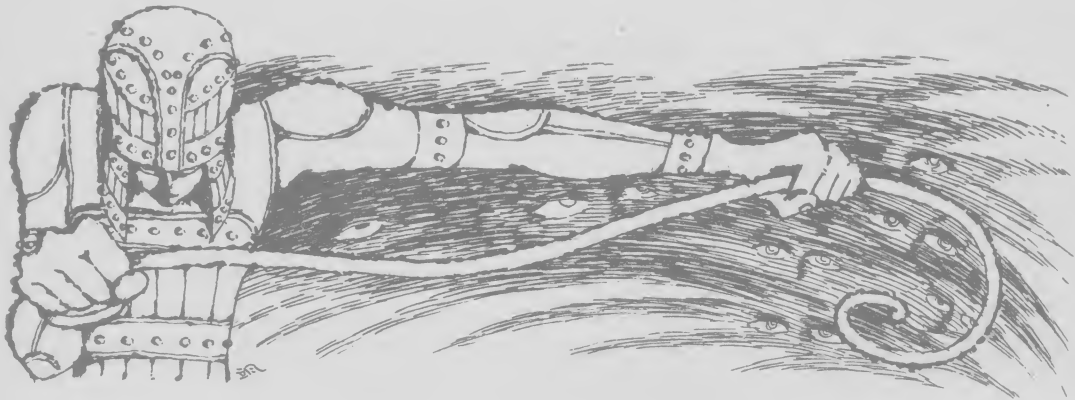
「助けてーっ」

砂に、岩に、足をとられて、玉櫛は、一度、二度、波の中に倒れる。それでもはねおきて、また逃げる。

「ワハハハハ、ワハハハハ」

白布は、楽しくてしかたがないようだ。まるで兎でもおいかけるよう

に玉櫛の前になり後になりして馬をはしらせる。
「よせっ、よせっ、白布！」
弓月は怒った。こんなかわいい、美しい少女に、何というむごいことをするのだ！ しかも玉櫛は、やがて白布の妻になる女ではないか。
「よせ！ やめろ、白布、かわいそうじゃないか！」
「ワハハハ、ワハハハハ」
弓月のことばには耳もかさず、白布は馬を駆る。
畜生！ 弓月は唇をかむ。本当は白布の方が、おれより少しはうまく馬にのるらしい。
が、やがて、玉櫛は、白波がくだける岩にポッカリとあいた洞窟の中へかけこんでいった。
「こい、弓月、おもしろいものをみせてやる」
白布は、その洞窟の前で、ひらりと馬からおりた。
弓月もつづいて馬からおりる。
白布は、手にしたムチでピシリと岩肌を一打ちすると、その暗い洞窟の中へズカズカと入っていく。
弓月はそのあとにつづく。
中へ入ると、それは真っくら闇ではなく、奥の方から、ひそやかな光と、人々の声がきこえてくる。
その声は、すべて女の声のようである。
この奥にいったい何者がいるのか。弓月は期待と不安でいっぱいの胸をおさえて、白布のあとにつづく。
やがて、せまい岩のトンネルが終わった。そしてそこには、あっと思うほどの広さの、岩にかこまれた広間があったのだ。
しかも、その広間にいるのは、女ばかり。玉櫛と同じように髪と瞳の黒く澄んだ女ばかりが、身をよせあって数百人、座っていたのである。
女の中の何人かは生まれたばかりの赤ん坊を抱いている。
「わかるか、弓月」
「何が」
「おれたちが日本の土の上で生まれたわけだよ。みろ、この女たちは、日本に古くから住んでいた、出雲の神を信じる民族なんだ。ハハハハ、おれのおふくろも、ここにいる女のうちのだれかさ」
「白布！ それじゃ、お前は！」

「そうさ、おれたちは、騎馬民族と出雲族のあいのこさ。騎馬民族のおやじと、出雲族のおふくろとのな——」
そうか、それでわかった。海を渡って来た騎馬民族は、うちほろぼした出雲族の女たちを妻にして、子を生ませたのだ。
生まれた子はたしかにあいのこだ。しかし、そのことにより、この日本の国には将来何百年、何千年にわたって騎馬民族の血が絶えることなく流れていくのだ。
「ワハハハ、わかるか弓月。子どもは生まれて母親の乳房をはなれると、すぐおれたちがひきとって乗馬と騎馬民族の魂を教えこむ。血は少しはまじるが、魂はいつまでも騎馬

民族の子がこうしてどんどん成長するのだ。ワハハハハハ」
白布は笑いつづける。
しかし、弓月はじっとみている。この岩ばかりの広間に、身をよせあっている女たちの燃えるような目が、うらみをこめて白布の顔をにらんでいるのを——。
その女たちの中に、あの玉櫛もまじっている。
「わかるか、弓月」
三たび白布は同じことばをはく。
「こうしておれたちの祖先は、出雲族をほろぼし、大和朝廷をうちたてた。しかし、まだまだ、にげまわっている奴もある。それから北の国には出雲族とはまたちがう民族も住んでいる。やがてそいつらをすべてうちしたがえ、おれたちは大和朝廷を中心に、この日本の国に騎馬民族の王国をうちたてるのだ！」
だがしかし、いま弓月は白布のことばをきいていない。弓月は、じっと玉櫛の目をみつめている。玉櫛の深い憐みをたたえた、何かをうったえるような黒い瞳を、弓月はじっとみつめている。

そして心の中で叫んでいる。
（悪いけど白布、おれは忍者だ。忍者に出雲族も騎馬民族もない。第一、とつぜんそんなことを言われたって、そうかんたんにその気になれるものか、しかし、おれにはちょっと興味もわいて来た。いや興味というより、この美しい玉櫛のために、おれは何か一働きしてみたくなって来たんだよ）
弓月が、そこまで心の中で言ったときだ。
とつぜん、今まで黙っていた玉櫛が低くうたい出した。
「八雲たつ
出雲、白雲……」
はっとした。バカ、白布の前で、その歌をうたうやつがあるか！
が、玉櫛がうたいだすと他の女たちも一緒にうたい出した。
「八雲たつ
出雲、白雲
海にたつ
七重　地の雲
八重　天の雲
…………」
「やめろ！」
白布がどなった。どなりながらムチであたりかまわず、ピシリピシリとうちはじめた。
「やめろ！　出雲の女め！　奴隷め！　奴隷女め！　やめろ！　奴隷の歌はやめろ！」
ワーッと赤ん坊が泣き出す。
白布はいよいよ狂ったようにムチを鳴らす。
女たちはかえって反抗的になり、うたをやめない。
白布のムチは、岩へ、女の肌へ、ピシリピシリ、なさけようしゃもなくくいこんでいく。
「白布！」
ついに弓月はどなった。
「おれは、諏訪湖へ行くぞ！」
とたん、女たちの歌がピタリとやんだ。
白布のムチもとまった。
「ほんとか。スメラミコトの命令を守るというんだな」
弓月はうなずく。
「ああ、おれは諏訪へ行くよ」
「そうか」
白布はニヤリと笑う。
「早く行け。そして諏訪湖のほと

りに立てられるという天に向かってそびえる心の御柱をこっぱみじんにうちくだき、銅鐸をうちくだいて諏訪湖の底へたたきこんでくれ」

瞬間、弓月は女たちのうらみのこもった目が自分に向けられたのを知った。

だが弓月は笑いながら心の中でいう……。

（玉櫛、安心しろ。おれにはおれの考えがあって行くんだ。そして、いつか、きっと君を迎えにくるからな）

（二）

サッサッサッ

白い雪の上を、弓月はとぶように急いだ。

熊野山中できたえた忍者のからだは、風のように軽い。

雪の上を飛ぶように走っても、足跡一つのこさない。

白山の中腹から頂上にかけてふりつづいた雪は、おそらくまだ一度も人間の足に踏まれたことはないにちがいない。

白布と別れて丸一日。忍者弓月は諏訪へ向かって一直線の道をとった。

能登（古くは能等）から賀我（加賀・現在の金沢市あたり）へ、そこから一気に白山をこえて、斐陀（飛騨・現在の高山市あたり）へ出る。

そこからまたいくつの山をこえてそして須羽へ出るのだ。（現在の諏訪は、古くは須羽とかかれていた）

そのために弓月はいま、白山の新雪を踏んで走っているのだ。

走りながら、弓月の頭にはあの美しい少女玉櫛の姿がチラリチラリとうかんでくる。そしてそれと同時に、二本の心の御柱も思い出される。

天に向かってそびえたつ出雲族の心の御柱と、地面へうちこまれた騎馬民族の心の御柱だ。

おれは、壮大に豊かに、堂々と天へ向かってそびえる柱が好きだ。あの広い天へ向かう柱こそ、おれのこころだと思う。それにひきかえ地面へうちこまれる柱など、なんでおれのこころなもんか。おれのこころはそんないじけたちっぽけなものじゃない。騎馬民族に滅ぼされた出雲族は、きっと広い、大きなこころの持ち主ばかりだったのではないだろうか。

いつか、弓月はまだよく知りもしない出雲族に対して、いいようのない親しみさえ感じているのだった。

ガオーウ！

とつぜん、ものすごい動物の吠え声に、弓月はパッと五メートルほど一気にとんだ。

その弓月の立っていたところへ、いきなり真っ黒な動物が風のようにかけて来た。

巨大な、牛の二倍くらいもあろうかという黒いけものだ。目がらんらんと光っている。

（熊だ！）

しそんじたと知ってそのけものは、ふたたび身をたてなおすと、牙をむいて弓月をにらんだ。

巨大な熊がえさをさがして雪の上をさまよっていたのだ。

ガオーッ

熊はうなった。

瞬間、熊の太い四本の足が雪をけって一気に弓月に向かった。

弓月は、身をかがめるとパアッと雪を煙の如く熊の目の前でかき上げた。
熊の大きな胴体が弓月の頭上をかすめてとんだ。
一瞬、はねおきざま、弓月の手から、針のような松葉手裏剣が雨の如くとんだ。
ギャオーッ
熊は叫んだ。
ピッ、ピッ、ピッ
みよ、弓月の細い手裏剣はねらいあやまたず、熊の両眼にはりねずみの如くつきたったのだ。
どっと血が流れる。
とたん、弓月は短剣をひきぬくや、そのままダッと熊の脇腹におどりこみ、心臓につきたててグイとえぐった。
ガオオオオ――ッ
それが、熊の最後だった。
ほっとしたとき――
ビューウン！
弓月の耳をかすめて、雪の上をとんだ一本の槍！
誰かいる！
この白山の山奥の雪の中に誰かいる！

しかも、そいつは、明らかに熊ではなく弓月をねらって槍をなげた！
「誰だ！」
雪にささった槍をひきぬきながら弓月は叫んだ。
槍は、太い木の枝に、三角形のくさびのような鉄をむすびつけたものだ。
（はじめてみるぞ、こんな槍は。みやこにも、能登軍団にも、こんな槍はなかった！）
「出てこい！」
もう一度、弓月はどなった。
と、その声に答えるかのように、目の前の雪がムクムクと盛り上がりそこから一人の大男が出て来た。
黒い長い髪の毛をボウボウと肩までたらし、頬からあごにかけて、これまた黒い長いヒゲをもやもやと生やした大男だ。
「誰だ！　お前は！」
しかし、そのひげもじゃの大男は弓月の方をみてはいなかった。大男はじっと殺された熊をみつめていたのだ。
「おお……カムイ」
大男の目にみるみる涙がわき出して来た。
「おお、カムイ、わしらの神よ！」
涙がひげもじゃの頬を伝った。その涙をぬぐおうともせず、大男はどっと倒れている熊に走りより、雪の上にひざまずいて、熊の頭をしっかりとかかえると、大声で泣きはじめたのである。
「おお、カムイ、わしらの神よ……」
弓月はことばもなくぼうぜんとみつめていた。弓月はしらなかったのだ。この大男こそ日本の北の国にすむアイヌ民族で、カムイとはアイヌのことばで「神」という意味であったことを――。
だがしかし、北の国の民族アイヌが、なぜこんな白山にいたのか。果たしてアイヌは彼一人なのか、それとももっと大勢いるのだろうか。
目の前にいるアイヌ民族。西の能登には騎馬民族の能登軍団。東の諏訪には逃げて来た出雲族がいるという。弓月はいま、その三つの民族のまっただ中で、何となく困っていた。なぜなら、弓月は、男が泣くのをはじめてみたからである。

（つづく）